

研究者からのメッセージ

研究

—けんきゅうびより—

日和

Vol.  
08

研究は楽しい。

膨大な文献をひも解き、数えきれないほど実験を繰り返す。

それまでわからなかったことを解き明かす感動、

そしてその先に、世界を変える、未来をつくる喜びがある。

ここにあるのは、

「なぜ?」「好き」をとことん追究する、

そんなワクワクすることを一生の仕事にした先輩たちの物語。

その一つひとつが、あなたの未来を照らす道しるべになることを願って

輝き続ける研究者たちの言葉を贈ります。

P.02



Case #01

今できることを見つけ、  
研究を続けることが大切

サキヤ ラタ  
衣笠総合研究機構 歴史都市防災研究所 准教授

P.04



Case #02

研究を楽しむ気持ちと  
オープンな心で拓いた道

石原 悠子  
グローバル教養学部 准教授

P.06



Case #03

研究も、子どもとの時間も  
充実させる環境を自らつくる

峯元 高志  
理工学部 教授

P.08 活動紹介

# 今できることを見つけ、 研究を 続けることが大切

サキャ ラタ

衣笠総合研究機構 歴史都市防災研究所 准教授

## Profile

2004年、美作大学生活科学部福祉環境デザイン学科を卒業後、2007年、京都府立大学人間環境科学研究科修士課程を修了し、2013年、京都大学大学院工学研究科博士課程を修了。同年から東京大学工学系研究科の外国人特別研究員、特任研究員を経て、2019年、東京都市大学環境学部で非常勤講師に。2020年4月から現職。

## 居住環境の向上に 貢献したい

岡山県にある美作女子大学(現・美作大学)に新設される生活科学部福祉環境デザイン学科(現・社会福祉学科)に入学するため、ネパールから来日したのは1999年でした。そこで関心を持ったのが、高齢者をはじめ誰もが安全で暮らしやすい居住環境に関する研究です。折しも日本では、「バリアフリーデザイン」が登場し始めた頃。先進の知識を学び、母国の居住環境の問題解決に貢献したいと思い、進学しました。

大学院では、住居からコミュニティや都市にも目を向け、学びを広げました。博士課程ではネパールの歴史都市パタンをフィールドに、歴史や文化、社会システムの中で形成されてきたコミュニティの共同性をいかに継続し、「人々が安心・安全に暮らせるサステナブルな都市社会」を目指せるかをテーマに研究をしました。海外研究のため、現地調査の実施およびその成果を当国だけではなく、日本をはじめ先進国にも生かす方法を模索し、頭を悩ませることも多くありました。その頃、出会った夫にも支えられ、6年をかけて博士号を取得しました。

## 子育てで 研究が停滞するのか

2014年に結婚し、翌年5月に子どもを出産。ネパール大地震が起きたのは、臨月を迎えたときでした。家族は皆無事で、安心したのもつかの間、特任研究員として所属していた東京大学の教授より声をかけてもらい、現地調査に赴くことになったのです。生後4カ月の子どもを連れてネパールに赴いたのが、出

産後初めてのフィールド調査でした。現地では、私が調査に出かけている間、両親、とりわけ母親が子どもの面倒を見てくれたおかげで、無事に調査を終えることができました。同時期に、立命館大学の教授らと被災地でのワークショップやインタビュー調査を行い、2019年、その成果を災害記憶の記録として書籍にまとめました。これがコミュニティ防災、災害対応マネジメントなどさまざまな研究テーマに出会うきっかけになりました。

しかし日本に戻ってからは家庭と子育てで、思うように研究できませんでした。非常勤講師を始め、国内学会発表は続けましたが、子育てに追われて研究や論文執筆の時間は限られる上に、非常勤講師では科研費などの公的な研究助成を申請することもできません。「私のキャリアは、もう終わりだ」と、絶望的な気持ちになったこともありました。立命館大学歴史都市防災研究所への赴任を打診されたのは、そんな時です。夫と離れて暮らすことに最初は迷いもありましたが、家族に背中を押され、赴任を決意。2020年4月、子どもと二人、京都にやってきました。

## 諦めずに 続けることが大事

赴任したのは、コロナ禍の只中。保育園も見つけれない中で、ありがたかったのは、立命館大学に保育園があったことです。それに加えて、テレワークになった夫のサポートにも助けられ、研究生生活を軌道に乗せることができました。

子どもが小学生になった今は、以前より時間の融通も可能になり、研究と研究所の業務

に忙しい毎日を送っています。当研究所主催のユネスコ・チェア「文化遺産と危機管理」国際研修では、ユネスコ・コ・チェア・プロフェッサーおよび国際研修のコーディネーターとして日本の文化遺産防災学を世界に伝え、国際貢献する役割を務めています。

また、個人研究においてもネパールの歴史的建造物や周辺伝統的空間およびそれらの継承の秘訣である管理システムを災害時に生かす方策を研究しています。研究成果をネパールに還元することに加え、ネパール人研究者として、正しいネパールの知見を日本に発信する役割も果たすべく、使命感を持って研究に取り組んでいます。

多くの女性研究者が、まさに今からキャリアを築いていこうという時に結婚や出産・子育てに直面します。その間サポートを受けられず、自分が取り残された気持ちになることもあります。皆さんに伝えたいのは、焦らず、決して諦めずに続けること。私が本学への赴任を決めたのも、学会発表や小論文の執筆、書籍の編集など、今できることを見つけ、辞めずに研究を続けたからでした。必ずチャンスが来る。そう信じて、自分自身の研究課題を追求し続けてほしいと思います。



# 研究を楽しむ 気持ちと オープンな心で 拓いた道

石原 悠子

グローバル教養学部 准教授

## 豪国・欧州、米国へ グローバルに知見・経験を得る

日本人の両親の下、アメリカで育った私は、幼い頃から自分のアイデンティティについて考えることが多く、「自己とは何か」といった問いから、自然と哲学に興味を引かれるようになりました。

大学時代に留学したオーストラリアのモナシユ大学で哲学の面白さを知り、卒業論文では近代日本で活躍した哲学者・西田幾多郎について研究。卒業後は、日本哲学の研究で知られる京都大学大学院に進学しました。父親が物理学者で、漠然と「私もいつか研究者になりたい」と思っていたので、進学することに迷いはありませんでした。博士課程では、日本哲学と西洋哲学との比較研究をしたいと考え、見つけたのが、現象学で名高いデンマークのコペンハーゲン大学でした。3年間、同大学の主観性研究センターで、西田幾多郎とハイデガーの比較研究を行いました。

その後は縁あってアメリカのプリンストン高等研究所に誘っていただき、学際的研究プログラムの招聘研究員として赴任。AIやロボティクス、心理学など幅広い分野の研究者と



一緒に研究する機会を得ました。今でも忘れられないのは、初めて皆を前に自分の研究を説明した時、うまく伝えられなかったことです。もともと「自分とは何か」という普遍的な問いから哲学を志したのに、専門性を追究する中で、いつしか専門家以外には理解できないことを研究するようになっていたと気づき、ショックを受けました。「これは私の目指すところではない」。そう思ってから、以前にも増して多分野の人と関わるようになりました。それが現在の研究につながっています。

## 育児・生活の悩みを 共有できる場があれば

立命館大学に赴任したのは、2019年。外国人学生も多く学ぶグローバルな環境を日本で実現するグローバル教養学部 (GLA) に魅力を感じて応募し、採用されました。

帰国が叶ったのは、プリンストン高等研究所で同僚だった夫が賛成・同行してくれたことも大きかったと思います。その後出産し、1年半の育児休暇を経て、2023年4月に本格復帰しました。

これだけ長期の育休を取得できる制度が整っているのは、非常にありがたかった一方で、研究を途中で中断せざるを得ないことには焦りもありました。育休中も、オンラインで参加できる研究ミーティングで発表するなど、少しずつでも研究を続けることを心がけていましたが、自宅では、頭を切り替えるのも簡単ではありません。私が考え事をしていた時、幼いながらに娘がそれを察するのを見て、「これではいけない」と思い直しました。子ども

の成長を見る喜びも大切にしたい。そう思ってから「これがずっとは続かないから」と割り切るよう自分に言い聞かせていました。

復帰してからも、両立の難しさは変わりません。子どもが熱を出して、保育園に急遽迎えに行ったり、担当授業を休講やオンライン授業に切り替えなければならないこともありますが、GLAの先生方、そして学生たちにも理解してくれる雰囲気があるので、働き続けられています。

生活とのバランスを取るのに苦労する時、実感するのがコミュニティの大切さです。職場や地域社会の中に、働く人同士がプライベートなことを話したり悩みを共有できる場があればいいと思っています。

## 専門の追究と一般への発信 両方できる研究者を目指して

現在は、学術横断的なプロジェクトの一員として、「意識」について研究しています。心理学や数学、ロボティクスなど多様な分野の研究者と意見を交換するのは、非常に新鮮です。それが縁で、数学の研究者の方との共同研究も始まっています。また広く一般に哲学の面白さを発信していくことにも力を注ぎたいと思っています。専門を追究しながら、それをより多くの人に伝えていく。両方のバランスを取れる研究者を目指しています。

研究者を志す皆さんに大切にしてほしいのは、楽しむ気持ちと、オープンな心です。縁や出会いがあっても、そこに飛び込まなければ先は見えてきません。将来を思い煩うより、目の前の自分の関心事にしっかり向き合うこと。そうすれば道は拓けていくと思います。

# 研究も、 子どもとの時間も 充実させる環境を 自らつくる

峯元 高志

理工学部 教授

## Profile

1997年、立命館大学理工学部から飛び級で同大学理工学研究科へ進学。2001年、博士課程後期課程修了後、アメリカ・テラウェア大学にポスドク研究員として赴任。2004年、立命館大学理工学部講師に就任。2011年、理工学部准教授、2015年から現職。

## 太陽電池の面白さに 惹かれ、研究の道へ

太陽電池を研究するきっかけは、立命館大学3回生の時、太陽電池の研究で名高い濱川圭弘教授・高倉秀行教授の研究室を志望したことでした。著名な教授の下で、次代のクリーンエネルギーと目されていた太陽電池を研究できることに興味をかき立てられたのが、すべての始まりでした。

大学時代から一貫してCIGS系といわれる太陽電池を研究しています。Cu・In・Ga・Se(銅・インジウム・ガリウム・セレン)の4つの元素を材料に用い、圧倒的シェアを持つ一般的なシリコン太陽電池では実現が容易ではない柔軟性・軽量性を有し、しかも低コストで作れる化合物半導体薄膜太陽電池の開発に取り組んできました。

修士課程1回生の時には、「連携大学院制度」を活用し、松下電器産業株式会社(現・パナソニック)中央研究所で研究する機会に恵まれました。先進の実験装置が揃った環境で、半導体薄膜やデバイスの作製、性能試験を行い、研究の面白さを実感。研究チームのリーダーから「博士号を取ったら？」と勧められたこともあり、博士課程に進学したものの、「研究者を目指そう」と考えていたわけではありません。岐路に立つたび、「面白い」「やってみよう」と思える道を選んできました。

## 米国の研究スタイルの 違いに衝撃

「博士号を取ったら、海外で研究したい」。そう考えていたので、博士課程を終えると、一

路アメリカへ。米国の太陽電池研究の中核拠点CoE(Center of Excellence)として知られるテラウェア大学で、ポスドク研究員として1年半を過ごしました。世界屈指の太陽電池研究の拠点で研究できると、期待に胸を膨らませていましたが、着任早々拍子抜けすることになりました。

まず驚いたのは、研究室の活動時間の短さです。朝8時に始まり、午後3時か4時にはほとんどが仕事を終えて帰ってしまいます。早朝から夜遅くまで実験装置の前に釘付けになっていた日本での研究生活とは、雲泥の差です。一番の違いは、研究の進め方にありました。太陽電池の研究では、化合物を積層・結晶成長させて半導体薄膜を作製し、各種装置で性能を確かめることの繰り返しです。日本では、ほとんどの工程を一人で行っていましたが、アメリカでは、研究者の他に技術職員がいて、各工程を分担しています。そうすることで、余裕を持って研究を進められることに気づかされました。この経験は、帰国後の研究に生かされることになりました。

## チームで研究する体制で 研究と生活を両立

2004年に帰国後、立命館大学理工学部に着任。結婚し、二人の子どもが生まれてからは、家族と過ごす時間も大切にしています。共働きのため、毎朝子どもを保育園に送り届けてから出勤し、家事分担当も当たり前になりました。事務業務などは自宅に持ち帰り、子どもが遊ぶ傍らで仕事をすることもあります。無理をしている感覚はなく、私自身が子どもと一緒にいる時間を心から楽しんでいます。



研究しながら生活も充実させるために心がけてきたのが、「皆で協力する」環境をつくることです。一人で研究するのは負担も大きく、達成できる成果にも限界があります。そのため競争的資金や補助金を獲得して必要な人材を確保し、チームで研究を推進する体制づくりに尽力してきました。私の役割は研究目的を明確にし、チームを統括するとともに、責任を持って成果を発表すること。その結果、今では複数の研究プロジェクトを遂行し、高い成果を挙げながら、自分の時間も確保する働き方が可能になっています。

最近、CIGS太陽電池の開発を継続しながら、新たな研究にも着手しています。それが、ペロブスカイトと呼ばれる材料を使った太陽電池の開発です。高い変換効率を有し、しかも軽量で柔軟性に富むなどシリコン太陽電池にはない特長を持っています。加えて材料となるヨウ素は国内で多く産出されることから、「国産の太陽電池」として実用化を目指し、薄膜開発や性能試験、メカニズムの解明に取り組んでいます。

「自分の研究は必ず人類の役に立つ」と、本気で信じることが、研究の原動力です。何より研究が好きだから、ここまで続けてきました。将来のキャリア選択は、皆さんの心次第です。ぜひ「好き」だと思ふ道を突き進んでください。

# 立命館大学 男女共同参画推進に伴う取組成果

## 1. 文部科学省「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(特色型)」事業の最終評価でS評価(最高評価)を獲得

2016年度に採択された文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(特色型)」の最終評価において、S評価(最高評価)という結果を得ました。

学長・総長のリーダーシップの下、効果的な事業実施体制を構築し、

法人・教学一体となって女性研究者の活躍を推進、所期の目標を超える成果を挙げたことが高く評価されました。引き続きダイバーシティ推進に係る私立の大規模総合大学のモデルとなるよう、事業の継続と発展を図ってまいります。

総合評価 S 所期の計画を超えた取組が行われている	目標達成度	取組	取組の成果	実施体制	実施期間終了後の取組の継続性・発展性
	S	S	S	S	a

※国立研究開発法人科学技術振興機構HPより

## 2. 文部科学省「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(先端型)」事業の中間評価でA評価を獲得

2020年度に採択された文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(先端型)」の中間評価において、A評価という結果を得ました。

学長直轄の「リサーチライフサポート室」が総長直轄の「D&I推進

室」と連携を図りつつ、学園全体の合意を得ながら取組を進めていることが高く評価され、「実施体制」の項目は「s」評価となりました。最終年度に向け、創設した制度の効率的な運用、成果の具体化が課題となります。

総合評価 A 所期の計画と同等の取組が行われている	目標達成度	取組	取組の成果	実施体制	今後の進め方
	a	a	a	s	a

※国立研究開発法人科学技術振興機構HPより

## 3. 女性教員在籍比率の向上



## 活動紹介

海外で研究を行ったことのある本学の研究者にインタビューし、諸外国におけるワークライフバランスや研究環境に関する情報をお届けする「世界のキャンパスから」を制作しました。冊子と当室ホームページでも公開していますのでぜひご覧ください。

海外での共同研究などを予定する研究者の皆様が、渡航先の研究機関における円滑な研究活動を始められるよう、今後も情報の充実を図ります。



「世界のキャンパスから」ホームページ



## コラム

### ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ 特色型最終年度、先端型中間年度を終えて

リサーチライフサポート室は、女性研究者支援と男女共同参画推進のための組織として、2016年12月に文部科学省「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ(特色型)」の採択にあわせて設置されました。女性研究者の研究環境整備や研究力向上、また、女性研究者のリーダー育成、上位職への積極登用など、キャリアアップを支援しています。

「特色型」では当初の目標をすべて達成することができ、中間・事後評価ともに最高評価のS評価をいただきました。具体的な取り組みとしましては、専門研究員の継続的な研究活動を支援する「女性研究者キャリアパス支援プログラム」の創設、ライフイベント中の研究活動継続を応援する「研究支援員制度」で支援員の雇用経費の助成、研究者が気軽に日々の研究やライフイベントとの両立などについて情報交換ができる場として「OPEN DAY」の開催などがあります。また、女性研究者の裾野拡大を目的として、研究者の声を届け、未来の道の選択肢のひとつになることを願って発信している「研究日和」もそのうちの一つです。

2020年に採択された「先端型」では中間評価でA評価をいただいています。今後も「特色型」での取組みを発展させていくとともに、「先端型」の最終目標達成に向け、引き続き女性研究者の活躍に向けた取組を進めていき、研究者に寄り添えるような活動を考え、努めてまいります。



男女共同参画推進リサーチライフサポート室  
室長 岡田 豊 (生命科学部 教授)、事務局一同